室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

自己理解のサイエンス：序文

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2007-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): self, self-understanding, multiple aspects of self, reality of self 作成者: 橋本, 邦彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/93

室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

自己理解のサイエンス : 序文

その他（別言語等）のタイトル	The Science for Self-Understanding : Introduction
著者	橋本　邦彦
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	52
ページ	1-2
発行年	2002-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/93

室工大紀要第52号(2002)1～2

自己理解のサイエンス：序文

橋本　邦彦*1

The Science for Self- Understanding : Introduction

Kunihiko HASHIMOTO

（論文受理日　　平成14年８月30日）

Abstract
The special contributions in this issue consist of seven papers, which aim at investigating the way of self-understanding as their shared problem. The SELF has multiple aspects: the self on the neuro-physiological level; the self on the phenomenological level; the self on the physical level; the self on the social-interactive level. These selves construct one and the same SELF, connecting with one another. The contributors belonging to different domains of study, such as psychology, philosophy, linguistics, kinesiology and biology, will explicate the reality of the SELF from various perspectives.

Keywords: Self, Self-understanding, Multiple Aspects of Self, Reality of Self

1　特集論文の目的

自己には様々な側面がある。

（１）脳の神経生理学的な側面での自己：前頭葉前連合野を中心にして生み出される自己。

（２）現象学的側面での自己：生み出された自己を意識化し、記憶、思考、感情などに投射し、同一性・連続性を維持する自己。

（３）身体論的側面での自己：物理的な生命体として、環境の中で活動する自己。

（４）社会的側面での自己：社会や他者との相互作用により形成される自己。

（１）～（４）は、さらに細分化可能だが(1)、それは自己のもつ多面性の一つひとつを取り上げてその特徴の際立ちに光を当てる作業の結果であって、けして自己が分裂しているということを意味してはいない。むしろ、それぞれの側面で捉えられる自己は、相互に影響し合い連関し合いながら、一つの同じ「自己」を構成していくのである。

私たちが日常生活の中でどのように自己を理解しているのかを探るのが、この特集の目的である。心理学、哲学、メタファー研究、言語学、実験音声学、運動生理学、生物・生態学という異なる研究領域から自己の多面性に迫っていく。これらの研究領域は、その歴史、方法、目的、結果などの独自性を保持しつつも、人間理解を主要な研究対象としている点で、密接に関連しているのである。

各論文での成果をパッチワークのように継ぎ合

*1 共通講座

わせていくことで、自己の真の姿が浮き彫りにされるだろう。

2　論文紹介

松本敏治・前田潤の論文は二つの柱から構成されている。一つは、行動論から条件付けに焦点を当てて、人間は意外にも環境要因に自らの行動を支配されている事実を明らかにする。もう一つは、分離脳患者に見られる行動や自己理解の特徴から自己の所在を確定する上での困難さを、分離脳の示す行動パターンから統一された自己が存在するという暗黙の前提の疑わしさを指摘する。

二宮公太郎の論文は、フッサール哲学で展開されている志向性の基本的な構造を、知覚という最も根源的な場面の中で考察する。具体的には、射影・地平、時間意識・生きた現在、身体・キネステーゼなどについて議論し、その後、意識作用一般にまで考察対象の範囲を広げていく。この考察によって、志向性と自己との関係が説明されるだろう。

橋本邦彦の論文は、身体部位を示す語を用いた英語の慣用メタファーを分析する作業を通して、私たちが自らの身体をどのように経験し理解しているのかを明らかにする。一見、多様に見える個々のメタファー表現の根底には、認知上の概念化を操作する限られた数の概念メタファーが働いている様子が描き出される。

西田剛・塩谷亨の論文は、どのような発話にも話者が必ず存在し、どのような文書にも書き手が必ず存在している事実を証明した上で、この話者/書き手こそが自己を指示し、自己の視点が言語表現に深い影響を及ぼしていることを解明する。データとして、指示詞、譲渡動詞、往来動詞を取り上げる。

島田武・福盛貴弘の論文は、脳波の一種である事象関連電位を用いて自己と他者の音声認識の違いを考察している。最初に、ヒトの知覚や認知を究明するのに使用されている方法を概観し、次に、電気生理学的方法としての脳波を導入する。最後に、事例研究としてP300という事象関連電位の成分を用いた自己と他者の音声認知の違いを見る。これら一連の考察を通して、誘発電位や事象関連電位が脳内認知を観察するのに有益であることが示される。

上村浩信の論文は、運動時の生体を理解することが運動生理学的に自己を捉えるのに重要であると主張する。運動時においては、筋活動が円滑に行われるために効果器官である筋肉にエネルギー源を送り、反対に、運動不足時においては、呼吸循環器系のシステムが筋肉で造られる老廃物を送り戻すという現象を、脂肪細胞、骨格筋から検討している。

若菜博の論文は、生物学、自然史、環境論の立場から、自然、社会、文化をキーワードにして、そこから浮かび上がってくる自己の多様なあり方とその把握の仕方を論じている。

以上７編の論文から、人間が身体の内と外とで、また、自らを取り巻く環境との相互作用の中で、自己をいかに経験し理解しているかがはっきり見てとれるだろう。本特集は、領域横断的な研究の重要性と実り豊かな可能性とを、私たちに披露してくれるのである。

注

(1) Lakoff, George, and Mark Johnson, (1999), Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought, A Member of the Perseus Books Group: New York.

Sedikides, Constantine, and Marilynn B. Brewer (eds.) (2001), Individual Self, Relational Self, Collective Self, A Member of the Taylor & Francis Group: Philadelphia.

北山忍, (1998), 自己と感情：文化心理学による問いかけ, 共立出版：東京.

以上の文献を参照のこと。